

考古余話II

富山市杉谷A遺跡小考～第10号方形周溝墓出土銅鏃をめぐって～

小黑智久

1. 遺跡と銅鏃

富山市杉谷A遺跡（富山市教委 1975）では、弥生時代終末期の墓域（方形周溝墓 17 基、円形周溝墓 1 基、土墳墓 2 基）が確認されている。方形周溝墓は大型墓（一辺 10m 程度）6 基、小型墓（一辺 5 m 程度）11 基であり、被葬者の階層差が墳丘規模や棺型式に表れている。ここでは、第 10 号方形周溝墓の割竹形木棺内出土有茎三角形銅鏃を検討する。なお、第 10 号方形周溝墓は一辺が 11m と群中最大規模を誇り、溝からは底部穿孔壺など多数の土器が出土している。

銅鏃是一部欠損するものの、長さ 3.0cm、最大幅 1.1cm、最大厚 0.6cm、重さ 1.9g である。古墳時代前期にも残るが、弥生時代後期～終末期に特徴的な形態である。富山県域での確認例は本資料と氷見市大境洞窟・朝日貝塚例のみである。本資料は、弥生時代終末期の石川県金沢市下安原海岸遺跡例（前田 1996）と形態や大きさが酷似している。

2. 北陸の製作地を考える

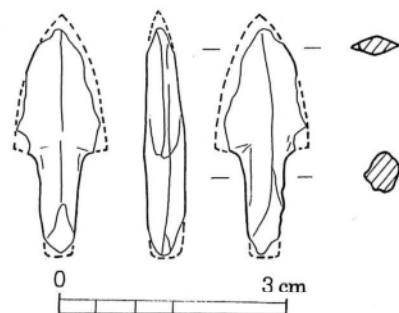
弥生時代後期前半の石川県小松市一針B遺跡では、竪穴住居から土製の鋳型外枠や鉢形土器（とりべ）が出土した。住居を工房として青銅器の鋳造作業が行われ、鋳型の大きさから、銅鏃や銅剣などを製作していたと推定されている（林 2001・荒木 2001）。石川県金沢市大友西遺跡（前田前掲）では、溝底部から銅鏃未製品が出土している。一針B遺跡の存在を考慮するなら、本例は遠隔地から流通品ではなく、当地周辺で製作された可能性もあろう。

石川県域では加賀地方に弥生時代銅鏃が集中する。これは、加賀地方で銅鏃が生産されていたことに起因するのではなかろうか。能登地方での確認例は羽咋市寺家遺跡例のみであり（前田前掲）、能登・越中地方と遠隔地になればなるほど入手困難だった状況がうかがえる。杉谷A遺跡例もまずは加賀地方で生産された可能性を想定すべきである。弥生時代銅鏃は古墳時代銅鏃ほど研磨されることはなく、工人の癖を読み取ることは古墳時代銅鏃よりはるかに難しいが、詳細な型式学的検討と共に原料産地の推定データ（鉛同位体比法）の蓄積による原料比較が望まれる。

3. 今後の課題～井田川流域における王権形成過程の理解に向けて～

本遺跡からは銅鏃の他にも素環頭鉄刀や短剣、もしくは槍先、ヤリガンナ、鉄素材、ガラス小玉が出土している。この副葬品組成はほぼ同時期の福井市原目山墳墓群と類似しており、両者の関連性が注目される。鉄製品の入手契機・経路が類似していた可能性もあろう。素環頭鉄刀は第2号（小型墓）・第3号方形周溝墓（大型墓）から出土し、第3号方形周溝墓は第10号方形周溝墓とほぼ同規模である。隣接する王墓（杉谷4号墳・杉谷1番塚）との階層的位関係や地域社会の発展過程を検討するため、今後は供献土器の型式学的検討から方形周溝墓群の共時性の有無、あるいは先後関係を追究していく必要がある。本遺跡とほぼ同時期と考えられる杉谷4号墳の副葬品組成は不明であるが、杉谷4号墳の被葬者を盟主とする下位集団の墓域と目される本遺跡から素環頭鉄刀や銅鏃が出土したことは、杉谷4号墳や次代の杉谷1番塚（前方後方墳）の副葬品組成を示唆している。

（小黑智久）



杉谷A遺跡第10号方形周溝墓出土銅鏃

引用・参考文献

- 富山市教育委員会 1975 『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』
荒木麻理子 2001 「一針B・C遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第5号 財団法人 石川県埋蔵文化財センター
林 大智 2001 「一針B遺跡と千代・能美遺跡について」『石川考古』第262号 石川考古学研究会
前田雪恵 1996 「銅鏃」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 武器・武具・馬具Ⅰ』 石川考古学研究会